

〔書評〕

井上史雄著

## 『新しい日本語——『新方言』の分布と変化——』

小林 隆

## 一、内容の紹介

滅びゆく古い方言に代わって、新しい方言が生まれ、広まりつつある。井上氏は、その新しい方言を『新方言』と名づけ、ここ十年ほど研究を続けてこられた。その精力的なお仕事は、末尾の「文献目録」に示された論文の膨大さからも知られる通りである。本書は、その中から「方法論」としても、調査地域としても、できるだけ多様になるような」（308頁）論文一七篇を集め、一本にしたものである。いわば、井上氏の新方言研究のエッセンスが集約された書ということになる。

本書の概略については「あとがき」に述べられているので、それをもとに簡単な紹介を行う。まず、第一章「新方言の位置——東京周辺——」は、「全体への導入」として、『新方言』の定義や言語学・方言学特に社会言語学の中に占める位置についての論文をまとめたものである。誤用や放送の言葉との関わりも論じている。次に、第二章「新方言の同定——北海道——」には、「北海道日本海岸の『浜言葉』領域での住民全数調査に関する」報告を収める。「文体差（場面差）と年齢差を手がかりにして多変量解析法を適用し、『新方言』を現実を観察可

能な語のグループとして位置づけたもので、新方言研究の基盤となる論が展開されている。また、第三章「新方言の伝播——東北——」は、山形・青森を対象とした「グロットグラム（地理×年齢図）」と年齢層別言語地図に基づく論文を集めており、続く第四章「新方言の図様——東日本——」では、考察の範囲を東日本一帯に広げ、「多変量解析法」によって地理的分布パターンや使用者の特性について分析した論文などをまとめてある。最後の第五章「新方言の勢力——全国——」は、新方言の全国的な様相について、通信調査の結果を報告し、日本語の標準化と新方言との関わりについても触れたものである。以下本書の内容について、私見を述べさせていただくことにする。

## 二、新方言研究の意義

井上氏の本書における研究の意義は、旧来の方言ではなく、新しく生まれ広まりつつある方言に注目したことであろう。たしかに、これまでの方言研究は、老年層のことを対象とし、あるいはそれ以前の状態を指向するような方向で行われることが多かった。もちろん例えば言語地理学においても、変化の過程の最終段階として最も新しく発生した方言を位置づけはするのだが、その最も新しい段

階に焦点をしほり、若い世代に生まれくる方言を広く扱ったところに本書の特色はある。

普通、方言は衰退するものであり、共通語によって置き換わるものだと考える。若い世代を対象とする場合にも、共通語化の観点に立った研究は盛んである。その方言↓共通語という変遷のパターンに対して、一方で今なお新しい方言が登場しつつあり、古方言↓新方言というパターンも存在することを本書は示す。そこに本書が評価されるべき第一の点があると考える。ただし、新方言のおかげで方言の将来が安泰であるかのような表現が見うけられることにはかならずしも賛成できない。変化の流れ全体から見れば、新方言の発生は共通語化の速度に追いつかないのではなからうか。その点で、消えゆく古い方言の採集同様、新方言の調査も急を要すると言える。

ところで、「新方言」は、言語史上常に起こってきた言語変化の現代版だ(10頁)と認められる。したがって、新方言研究の意義は、「新形」の伝播がいかなるプロセスを経て行われるかを、その初期の段階から、明らかにしうる」ことにあり、また「変化と伝播の際に働く社会的・心理的要因を実証できる」ことにある(24頁)。この井上氏の問題意識は重要であり、広く新方言研究の意義として共鳴できるものである。そして、本書においては地域差の他、年齢・性・学歴・職業の差あるいは場面差などの社会的要因や、使用者の心理的要因からの分析が行われ、体系の単純化・類推・民間語源・類音牽引・混交など言語内的な変化の要因も取り上げられている。その中には、次にまとめるような興味深い指摘を含む。

●これまで、新現象は社会階層の上のものが文体的に高い場面で受容すると考えられていたが、新方言は逆に階層の下の者が低い場

面で受容する(21頁)。

●語彙項目と文法項目とは改新の普及のしかたに違いがあり、文法現象では地域差より年齢差・性差に左右されやすい(25頁)。

●新方言の使用者の性格は、地元志向で周囲の小集団への帰属意識が高く、活動的で新しい現象を受け入れやすいことである(26頁)。

●「見レル」「出レル」(可能)の進出や「飲マサセル」「書カサセル」(使役)の発生は、日本語の活用体系の単純化の流れにそったものであり、「違カッタ」の登場の理由は、日本語の品詞と意味の不一致にある(260頁)。

●現在東京の若者の志向することは、東京の外から採用した言い方もあり、かならずしも従来の共通語化論では説明しきれないものである(282頁)。

しかしながら、総じて本書においては、新方言の事実報告が主となり、先にあげた様々な要因の考察には深く踏み込んでいないように思われる。新方言発見の次には、なぜそれがそこで発生したのか、またなぜ消えずに定着したのか、さらにどのように周囲に普及したのかなど、新方言の成長過程に応じた疑問が湧いてくるが、そのような問題は本書においてかならずしも追求されていないように見られる。さらに、個々の事例の集積・総合の上に立ち、新方言の発生・伝播に働く要因自体を詳細に分析することは、これから待たれる面が大きいと言えるであろう。「これまで歴史言語学や言語地理学で指摘してきた言語変化の要因のほほすべてが新方言発生に働く」(16頁)のであり、それを現実のものとして観察しうる強みがこの研究にはあるわけだから、今後は要因の解明というテーマを正面にすえて論じてもらいたいと希望する。

### 三、新方言という概念

新方言の定義については、少なくとも3、16、112、161、247頁で述べられており、その内容も微妙に異なるが、最も新しく発表された論文のものを引用すれば、「若い世代に今ひろがりつつあり、改まった場面では余り用いられず(つまり文体が低く)、しかもいわゆる標準語、共通語とは語形が違うもの」(3頁)ということになる。この新方言の概念については議論があるようであり、井上氏自身別のところで整理しておられるが、次に私見を二三述べてみたいと思う。

まず、先の定義にないもので、地域性の条件が新方言の認定には必要と考えられる。つまり、どの範囲で地域を限った場合に、新方言と認められるかということである。例えば、A地域では最近若年層で使われはじめた言い方でも、それは隣のB地域から進出してきたものであり、B地域を中心に見れば、老年層まで使用している言い方だというケースは、例をあげるまでもなく多いであろう。また、A地域では新しくとも、まったく別のC地域では古くから用いられている場合もある。例えば、3頁に例としてあげられている「くすぐったい」のコチョバシイは、北海道では新しくとも、「日本語地図」32・33図によれば、北陸地方では比較的古くからの俚言のようである。これらのB・C地域においては、A地域では新方言であるものが古方言となり、別の新方言に侵食されつつある可能性も考えられる。あたりまえであるがゆえに、地域性の条件は新方言の定義からはぶかれたのかもしれないが、基本的なものとして指摘しておきたい。

次に、文体の面で、新方言は文体が低く改まった場面ではあまり

用いられない、という定義に触れる。この点は他では、「改まった場面よりは、ふだんの場面で多く使う」(16頁)とも述べられているが、これらの定義は新方言として認められた具体例において、矛盾するものがある。例えば、北海道島野の報告(第六節、図5・8・表1)において、「あぎ」のアオタンの使用率は家の中より校長との場面でしたしかに減りはするが、それでも共通語アザの使用率を上回る。「やぶにらみ」のアツチャメも同様である。また、「つむじ」のウズマキは、校長との場面においても減少せず、共通語ツムジの使用率を圧倒している。さらに「肩車」のカザグルマは、共通語カタグルマに比べれば使用率は低い、場面差はなく、小中学生ではかえって家の中より校長との場面が増えている。北海道増毛の結果(第五節、表1)においても、新方言と認定されたアオタン、アツチャメ、ウズマキ、カザグルマに島野と同様のことが指摘できる。その点で、これらの方言形が上位場面で共通語形と「おきかわる」という3頁の記述は疑問である。その他、東京の新方言としてあげられたボンナイフ(265頁)も場面差は小さい。

以上の文体に関する、定義と具体例との矛盾に対しての私見は、具体例の認定において定義に忠実であれ、というものではない。逆に、文体の低さという条件は、新方言を考える場合それほど重要視する必要がないのではないかと思う。もし、文体の低さにこだわらなければ、いわゆる俗語を中心に考察を進めることになりかねない。また、しばしば話題になる敬語表現の乱れも扱えない可能性がある。新方言にはアクセントも含む(47頁)というが、語アクセントの変化など、文体をもちだせば対象としにくいことになってしまう。したがって、むしろ文体的な条件にこだわらない方が、広く新しい言語

現象を把握することに有利ではないかと考えるのである。

最後に、定義にもりこむほどのことではないかもしれないが、どの程度成長した語形を新方言と認定するかという問題もある。あまりにわずかの人しか使わないものでは、言い誤まりなど一時的な現象と区別が難しい。162頁の「肩車」のチンチコ類の中には、そのような疑いをもつものもありそうである。もちろん、新形の誕生のときから観察を始めることはぜひ必要なことであるが、それらすべてを発生段階で即新方言と認定するかどうかは、検討を要する。

#### 四、新方言研究の方法

前節においては、新方言の認定に際して、文体の低さをそれほど重く見る必要のないことを述べたが、それは、文体差について無頓着であつてよいということではない。むしろ、本書において、家話す時に対して、校長と話す時ないしはテレビに出た時という二つの場面の対立で文体差をとらえているのは、新方言の分析にとつて単純すぎるような気がする。例えば東京において、着レル、ワカンナイ、イイジャンなどの言い方は新方言として取り上げられており、たしかに家より校長やテレビの場面では使用が減ると考えられるが、しかし、三者が文体的な価値において等価だとは思われない。ボンナイフ、ペロ、チャリンコなどの名詞についても同様である。これらの中には、比較的改まった場面でも使うものから、くだけた場面でしか用いえない俗語的、流行語的なものまで、文体上かなりの幅が存在するのではないかと考えられる。したがって、それらの文体差を、例えば設定する場面の数を増やして調査する方法により、詳しく把握することは必要なことである。新方言がその成長

過程に依じて文体的な特徴を變ずるようなことがあるとすれば、定期的な場面調査も興味深い。

さて、本書の特徴の一つとして、大量の調査データをコンピュータを利用して多変量解析、中でも「林の数量化理論第Ⅲ類」により分析するという方法があげられる。語形のパターン分類などを、客観的な計算で行おうというのであり、多くの成果をあげている。私は計量的手法やコンピュータ処理に疎いが、この点について無謀をかえりみず若干の疑問を述べさせていただく。

まず、林Ⅲ類の適用については、第六節において、語形を分類し新方言をグループ化する作業は「グラフの視察」では「主観的・直観的判断による所が大きい」(92頁)ため、林Ⅲ類を用いると述べられている。しかし、結果として得られた数値の図は、「年齢層別のグラフで増加カーブが減少カーブか、全国共通語形と一致するか、などの基準に照らし合わせて」(93頁)判断することになるのだから、それならば、結局「グラフの視察」に立ち戻ることになってしまうのではなからうか。第一二節においては、林Ⅲ類の結果は、グラフの代わりにグロットグラムとつき合わされることになるが、「各語形の分布パターンの意味を知るために、まずグロットグラムでの分布と照合」(200頁)するならば、やはり井上氏の言われる「主観的・直観的判断」が入らざるをえないのではないかと思われる。つまり、林Ⅲ類を適用することの積極的な理由が今一つのみこめず、林Ⅲ類のための分析という部分もあるように感じられるのである。

また、林Ⅲ類の第1軸、第2軸の意味にも疑問がないわけではない。例えば、第一二節の林Ⅲ類の結果(200頁、図1)について、第1軸は地域差を示すと考えられるという。その第1軸において、「びり」

のヒリとパツケはほぼ似通った値に位置するが、グロットグラム(20頁、図2)では、ヒリは全域に比較的まんべんなく分布するのに対して、パツケは新庄中心の分布を示す。そのような分布の形態の差が、第1軸では消されてしまうようである。また、第2軸も地域差に関わり、プラス側は新庄市に多い語形というが、グロットグラムと対比すると、新庄市を中心に分布するパツケが、新庄市にほとんど分布しないドツペよりかなり下のマイナスの値にあることがわかる。

その他、林III類の適用にあたっては、「原則して使用者五名以上のものに限った」とか、「項目によっては(共通語化などによる)細かな発音の違いを無視して、語形を大きくまとめた」(20頁)などの操作が加えられているが、殊に新方言研究にとつては、そのような微細な部分が問題となることもあるのではなからうか。

本書には、グロットグラム調査の結果が豊富に盛り込まれている。グロットグラムは、「一時点の調査という点では共時的な資料だが、年齢差という形で時代的(通時的)変化を反映して」(148頁)おり、微視的に詳細な変化をとらえることが可能と言える。この特徴を積極的に活用している点は、新方言の研究であればこそ意味が大きいと納得される。ただし、児童語など人の成長過程に応じた言葉の使い分けを通時的変化に含めてしまう危険はないか、あるいは地域を線上にとるため周囲の地域との関連が見逃されはしないかなどの心配は残る。

## 五、諸々の内容について

本書について、特に評したかったことは以上述べてきたところであるが、その他、内容について気のついたことを次に記す。

まず、第四節「放送の言葉の多様化と新方言」の、共通語化にとつて「放送は言われるほどに決定的な影響を与えているか、疑わしい」(44頁)、「もしも、放送の言葉が標準語・共通語の尖兵として圧倒的な力を持っているならば、このように「新方言」は生まれるはずがない」(49頁)という指摘は興味深い。しかし、どの程度の影響力を「決定的」とか「圧倒的」とみるかは解釈が分かれよう。また、単純に新方言の発生と結びつけてよいかどうか。この点は、注2などの研究もあり、さらに調査が必要と思う。

次に、第二章の北海道における一連の研究について、「北海道では大きな地域差を論ずる前に調査地点の性格を見る必要があり、また集落内の言葉の多様性(年齢差・職業差・学歴差・性差)を考慮すべきである」(71頁)、「日本語地図」の各インフォーマントの答えは、一地点ごとにその集落内の言語状況を忠実に代表しているとは考えられない」(61頁)という指摘も重要である。ただし、「日本語地図」は、一地点毎の回答より、やはり全体的な分布の相対で見るときと考える。また、「かつての浜言葉と内陸部との方言差がうすれ、都市化の程度による言語差が目立った」。「新方言」に見られた地域差は、共通語化のそれとは別のパターンを示している。(117頁)とある点も注目に値する。ただし、調査地域が北海道の西部に限られているため、今後は全域にわたる調査が望まれる。

第八節「音韻変化の伝播過程」在方言の動詞における「脱落」は、「音韻変化の理論的規則性と、現実に観察される音韻変化の例外の多さとのギャップ」(148頁)を、グロットグラムにより詳細に見せてくれた点、興味深かった。できれば、語・活用・音韻環境・拍数などの観点から、さらに体系的・網羅的な調査結果が知りたい。

第一一節「現代東日本のペイの分布と変化」は、東日本の方言分布と、東京・山形間のグロットグラムを総合的に考察し、視野が広がった。現在、国立国語研究所で作製している方言文法の全国地図の解釈の段階に、十分参考にさせていだきたいと考える。

## 六、本としての体裁など

終わりに、個人的な趣味も含めて、本としての体裁などについて感想を述べる。

まず、結果のみが論じられ、調査の概要・地点・インフォーマント・時期などが十分示されていない場合がある。第八節の荘内調査や第一一節の東京・山形間調査がそうである。北海道の調査も、年齢層毎の人数が知りたい。他の論文を参照せずとも、本書の内部でそれらがわかるようにしていただければよかった。

次に、記述の順序についても配慮が欲しい部分がある。例えば、「中興方言」「古方言」などのチームは第五節に現れるが、その説明は次の第六節を待たなければならぬ。また、新方言の定義があちこちに見られることは先に触れたが、できれば冒頭にまとめ、十分記述してほしかったところである。

第五章は、科学研究費による「共同研究の報告」（あとがき）だが、「五七年度の研究」「われわれ（藤崎班井上・荻野グループ）」など、事情を知らないと理解しにくい表現がある。その他、論文をそのまま載せたために、表現や参照指示に不備な箇所が見られる。

最後に、コンピュータから打ち出された図表をそのまま掲載している部分があるが、163、164、210、218頁の最上グロットグラムや270頁以下の全国地図など見にくいように思われる。最上グロットグラ

ムについては、249頁のように書き直したものもあるのだから、そこから統一してほしかった。記号を目立つものに替えたり、凡例の中でも漢字・仮名に直せるものは直すなど、読者の便を配慮すべきであらう。

以上は結局、論文を集めて一書を形作ることの問題点と言えるかもしれない。井上氏のこれまでのご研究の蓄積からして、内容のバラエティーを求めるより、私個人としては、関連論文をもとに十分にまとめ、論じてもらいたかったが、もちろんそれは将来に予定されていらつしやるのであろう。「あとがき」によれば、本書は新方言研究の入門書的な意図も兼ねているようであり、若い人たちの研究心を刺激することはまちがいないことと思う。

注文の多い書評になったが、それは、井上氏のご研究が、今後の学界の一つの潮流となるだろうと考えたからである。方言研究の新しい分野をきりひらいた本書が、多くの方々にも読まれることを希望する。

注1 井上史雄編『新方言』と『言葉の乱れ』に関する社会言語学的研究（昭58・3）第2章。なお、新方言の理論的な面については、井上・荻野『新しい言葉の伝播過程』（特定研究報告書、昭60・3）が整理されている。

注2 馬瀬良雄「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」（『国語学』125、昭56・6）

（昭和六十年二月二十五日発行 明治書院刊 A5判 三三三頁 五八〇〇円）

—— 国立国語研究所研究員 ——

（昭和六十年十一月二十日 受理）